

4. 5 そだつ：アンケート抄：Q 私の人生儀礼体験

Facebook&twitter「とある民俗学講師（の補足メモ）」

- ・テクニカルな問題（締切、タイトル表記、文章は添付ファイルではなくメール本文で！）
- ・内容上の問題（箇条書きではなく文章化すること、TPOを明記すること（とくに地名！）、挨拶は不要）
- ・「やったことがない」「通過儀礼を『経験』していない」はずはない
- ・「通過儀礼」／「儀礼」ではない「通過」／「通過」ではない「儀礼」／副次的に「通過儀礼」

【儀礼的捨て子】私の母が出産したとき、私の母は厄年で、これほどの地域までしていることなのかは分かりませんが、厄年に出産した母親は、子を家に連れて帰ってくるときに一度道端に子を置くなどして、自分では家に連れて入らず、母親以外の誰か（このときは祖母でした）が「この子、そこの道で拾ったんですけど、ここの家の子ですか？」と届けに来て、そして「あ、じゃあうちで育てます」というようにして家に入れるというものがありませんでした。これによって厄落としをされているとのことでした。私も母も生まれも育ちも神戸の西の端の方です。

【お宮参り】小学生の頃に両親から話を聞いて、お宮参りという儀式をとっても興味深く感じました。両親は奈良県奈良市今宮町にある帯解寺へ子授け祈願に行き、その後、僕を授かったそうです。そして僕が一歳になったタイミングで再び家族で帯解寺にお宮参りしたそうです。帯解寺は文徳天皇の妃である染殿皇后が安産を祈願し無事安産されたことから、858年、文徳天皇によって、無事に帯が解けた寺、帯解寺（おびとけでら）と名付けられたお寺です。1000年以上も前から、今回の講義で学んだ“帯祝い”のような儀礼が行われていたと知って、不思議な感じがしました。

【お食い初め】生まれて100日ほど経った頃、京都市内の実家でお食い初めをしました。祖父母が鴨川で石を見つけ、母が大きな鯛を買ってきて、家族で集まり、健やかな成長を祈ってお祝いをしてくれました。見つけてくれた石を口元にあてられた写真が実家に残っています。

【初節句】私が生まれてから初めて迎えた2005年3月3日のひな祭りの日、初節句を行った。これは私の健やかな成長を祈るとともに厄除けも目的とした。おひなさまの飾りは母方が準備する習わしであると大阪府岸和田市に住む母方の実家から連絡があったが、父方からもぜひ買わせてほしいと提案があったため、母方が譲る形でおひなさまを父方の実家に購入してもらい、リビングに飾った。母方からは代わりにお祝い金をもらった。後日、母方の祖母父が私の家に来て、ちらし寿司、お吸い物、デザートケーキを食べた。

【泣き相撲】私は大阪府堺市東区にある萩原神社という神社で、泣き相撲という赤ちゃんの健やかな成長を祈願する神事に参加したらしい。その地域で生まれた赤ちゃんが相撲のように土俵の上で泣きあうのだ。力は赤ちゃんなので使えないがその代わりとして泣き声で比べあうことで、赤ちゃんがか弱い生き物から強くなるための第一歩を踏み出すのだと思う。

【初誕生】母から聞いたところ、私は一歳の誕生日、北海道釧路市にある祖母の家で一升餅を背負った。店に一升餅を注文し、届いた一升餅を風呂敷で包み、私が立ち上がったのち、泣いて倒れるという、いわば典型的な一升餅の行事である。

【ドルジャンチ】最も印象深かったのは私の弟の「ドルジャンチ（1歳の誕生日）」です。ドルジャンチとは、韓国の昔からの慣習で、子供が1歳まで生き残ることが稀であったため、無事1歳を迎えて健康であることを祝うためにできた伝統行事です。韓国ではほとんどの家庭が行います。現代では、規模が大きい場合だと、ホテルやレストランなどで行うことが多いようです。家族だけでなく、親戚と友達を呼んで話し合う機会ともなります。弟は2012年3月、デグ市にあるドルジャンチ専門レストランで行いました。この行事で最も重要な「ドルジャビ」は、赤ちゃんの目の前にお金、糸、鉛筆、聴診器など、主に職業を象徴するさまざまなもの並べ、赤ちゃん自身に選んでもらい、将来の職業や運命を占う儀式です。日本の「選び取り」とよく似ています。弟が鉛筆と聴診器を同時に掴んで、みんなびっくりした記憶があります。

【七五三】私は兵庫県姫路市家島町にある坊勢島という離島出身で、五歳の時に七五三を祝った。普通は11月15日に行われるが、坊勢島では、神主が毎月4日しか島を訪れないので、私の七五三も11月4日という特別な日に行われた。場所は坊勢島にある恵比寿神社だった。私は袴を着て家族と一緒に神社でご祈祷を受けた。坊勢島には写真館がないので、当日記念写真を撮ることができなかったが、後日、船で本州に渡り、写真館で記念写真を撮った。当時は離島に住んでいるのが当たり前だったので何も感じなかったが、今振り返ってみると、普通とは少し違った、いい体験だった。

【稚児行列】4歳の秋、和歌山県橋本市隅田八幡神社でだんじりが担がれる秋祭りの前日、稚児社参に参加した。古来、稚児社参に参加した子どもは丈夫に育つとされている。しかし、その意味を知らなかった私は、重い装飾を頭につけ、小さな足で長い坂を上ることに苦痛を感じた。近所の友達の家で化粧をし、衣装を身につけ、おでこに赤い点をかくのを嫌がっていた思い出がある。当日は雨で、行列は難しく、テント内での待機であったと母が語ってくれた。

【半成人式】小学四年の時、鹿児島市にある小学校で半成人式を行いました。小学四年は10歳で、20歳の半分の節目を迎えることを記念し、各々が自分の将来の夢を、その夢の仕事人になりきって発表するというものです。私は当時プロテニスプレイヤーになることが夢だったので、テニスウェアを着てラケットも持ってグランドスラム優勝する場면을想像してその演技をしました。半成人式は自らの今後を考える良い機会になった、思い出に残る人生儀礼でした。

【十三参り】十三歳の時、京都の法輪寺へ十三詣りに行きました。叔母にもらった振袖を着て、大人になったような気分がして嬉しかったのを覚えています。自分の好きな漢字である「笑」を書いて奉納し、本殿でご祈祷を受けました。帰りには、家族の邪魔にも負けずに渡月橋を渡り切ったので、しっかり知恵を持って帰れたと思います。

【初潮】中学1年の時、初潮がきた日に当時住んでいた家でお赤飯を食べました（神奈川県横浜市）。

【洗礼】中学二年の頃、大津市にある小さな教会で、クリスチャンとして洗礼を受けた。会衆の前で救いの証をし、口頭でクリスチャンとしての誓いをし、最後に全身を水に浸す洗礼という流れであった。儀礼によってクリスチャンになるというよりは、その信仰を周囲に表明することが中心である。洗礼は、親に言われたり、年齢によって受けたりするものではなく、自らの意志で受けるものであるため、年齢的な成長に伴う儀礼や学校に関わる儀礼とは異なるものであった。

【応援練習】自分が通っていた福岡県立小倉高校には、入学直後に応援練習という伝統のある行事がありました。校歌や野球部の応援歌などを入学生全員で練習するもので、応援団の先輩方が今の時代に合わないほど厳しくて、ありえないほど怒られるそうです。自分の代は、コロナ禍の影響でかなり優しくはありますが、それでも、終始ピリッとした雰囲気でもかなり怒られました。これを経験することで晴れて小倉高校の生徒として、高校の卒業生の方々にも認められます。

【入部】この春、京都大学ウィンドサーフィン部に入部した。ウィンドサーフィン部には、新歓で入部宣言をしたら、その日に現役部員から新歓参加者の前で胴上げをされるという一種の儀式のようなものがある。その時まで人生で一度も胴上げをされたことがなく、初めての経験したためか、自分が新しいコミュニティに属したのだという実感が強く感じられた。

【成人式】私は大阪市の生野区に在住しており、この地域の成人式に出席した。特徴的なのは、韓国・朝鮮の民族衣装であるチョゴリを着て出席している女子の数が非常に多いことである。私の友人も三分の一ほどの数の女子がチョゴリで出席しており、そのうち三人の友人のチョゴリは韓国で仕立てたものということであった。その友人は、「これからもコリアンとして生きていく。だからチョゴリで来た」と話をしてくれ、彼女の中学時代からの仲良しグループは全員同じ考えでチョゴリを着て来ている、と教えてくれた。この地域の成人式は韓国・朝鮮人、日本人、そして近い将来どちらかの国籍を選択しなければならない人たちにとって自分のアイデンティティを明確にするはたらきを担っている。